

## 現在主義・時制・Truthmaker

小 山 虎\*

### 1. はじめに

本稿の目的は、現在主義 (presentism) を擁護することである。現在主義とは、おおまかに述べると、過去や未来に位置する対象の存在を認めず、現在に位置する対象だけが存在するという存在論的主張である。よって、現在主義によれば、過去の人物であるソクラテスや未来の出来事である 2008 年の北京オリンピックは存在しないとされる。

このような立場を擁護することの眼目は、いわゆる A 論者と B 論者の論争に関連している。B 理論——正しい時間の記述法は「過去、未来、現在」ではなく「以前、以後」であるという主張——が正しいとしても、一体それはどうしてだろうか。その答えのひとつは「世界 (ないし実在) がそうなっているから」である。この答えによれば、特定の時点 (すなわち現在) から見て過去や未来に位置することは、存在者にとって何ら本質的な事柄でなく、存在者の間には相対的な (時間的) 位置関係があるに過ぎない。つまり、相対的な位置関係にある存在者によって世界全体が構成されているがゆえに、B 理論が正しいとされる。これに対し A 論者は、世界のあり方はまさに「過去、未来、現在」に依存していると主張できるだろう。もし現在であることが世界のあり方にとって本質的であるのなら、B 理論が正しいことはあり得ない。そして現在主義は、このような A 論者の主張に合致している。もし現在主義が正しいのであれば、ある対象が存在するのかという問いは、その対象が現在に位置しているかどうかによって依存することになるからである。このように、現在主義は、A 理論の正しさが何に由来するのかを説明するという意味でその基盤となる理論であり、よって現在主義に関する論争も、A 理論と B 理論のあいだの論争よりもより基礎的と考えることができる。

さて、関連する論争をざっと眺めてみると、現在主義はとても魅力のある立場である (あるいは「だった」) かのよう映る。なにしろ、ある哲学者によれば「少なくとも 19 世紀までは誰もが信じていた」(Bigelow (1996), p. 35) 考えであり、別の哲学者は「普通の人が受け入れている『常識』の見解」(Markosian (2004), p. 48) とまで言い切る。確かに、A 理論のことをまったく無視して考えても、「過去や未来の存在者などというものは実在しない」という主張には、どこかもっともらしいところがある。だが、その一方で、現在主義の旗色は非常に悪いというのが現在の議論状況である。

以下では、これまでに論じられてきた現在主義を整理し、そのどれもが困難を抱えていることを論じる (第二節)。そして、Truthmaker の概念に注目することによって、そのような困難を抱えていない新しいタイプの現在主義を提示する (第三節)。これらの議論によって、現在主義を擁護することの難しさと、擁護するためには何をしなければならないのかを示される。

### 2. 従来の現在主義とその難点

まず、現在主義を特徴づけることから始めよう。だが、実際には現在主義を厳密に規定することは容易ではない。ここでは、非形式的な特徴づけを与えることから始めて、本稿で検討する主要な現在主義を提示する。

#### 2.1. 現在主義とはどのような主張か

まず、一般的に現在主義は、次のような主張だと解されている：

(P) 現在の対象だけが存在する<sup>1</sup>。

\*日本学術振興会特別研究員 PD (慶應義塾大学)

<sup>1</sup> Cf. Markosian (2004), p. 47, Keller (2004), p. 84, Sider (2001), p. 11.

一般的に現在主義者は、(P)が真ならば、「ワープ航行する宇宙船が存在する」や「ソクラテスは存在する」といった文は偽になると考えている（どちらも現時点においては存在しないからである）。別の言い方をすれば、これらの文が真であることを認める立場は、現在主義のライバル説とみなすことができる。たとえば、次の二つの立場は現在主義のライバル説として知られている。

**永久主義 (eternalism) :** 過去、現在、未来のすべての対象が存在する。

**成長宇宙説 (growing universe theory) :** 過去と現在の対象だけが存在する。

永久主義によれば、どの時間領域に位置する対象もすべて同等に実在する。たとえば、2002年に行われたワールドカップ日韓大会と2010年に開催が予定されているワールドカップ南アフリカ大会は、どちらも同等の存在者である。すなわち、存在者の領域は時間の経過と無関係であり、永久不変ということになる（さらに、先ほどの例で言うと、ワープ航行する宇宙船が将来発明されると仮定すると、永久主義ではワープ航行する宇宙船は既に存在していると言ってよい）。

一方、成長宇宙説によれば、存在者の領域は時間の経過と共に拡大していくことになる。時間の経過とは、未来だった時点が現在になり、現在だった時点が過去になることである。よって、未来に位置する対象は時間の経過に伴って次々と現在、そして過去に位置する対象になり、存在者の領域に加えられることになる。永久主義の場合と同じくワールドカップを例にすると、ワールドカップ南アフリカ大会と2014年に予定されているブラジル大会は、どちらも現時点においては未来の対象である（よって成長宇宙説によればどちらも存在しないが、4年後には南アフリカ大会は現在の対象になり（よってその時点では存在する）、閉幕すれば過去の対象になる。しかし、この時点ではブラジル大会は依然未来の対象のままなので、存在者の領域はブラジル大会にまで及んでいない。だが、さらに4年が経過すれば、今度はブラジル大会が現在の対象になり、存在者の領域に含まれることになる。このように、存在者の領域(=宇宙)が徐々に広がっていくことが、この立場が「成長宇宙説」と呼ばれる所以である（再び先ほどの例で言うと、現時点ではワープ航行する宇宙船は存在しないが、100年後にワープ航行する宇宙船

が開発されると仮定すると、100年経てば新たに存在者のリストに加わることになる）。

## 2.2. 存在汎化と様々な現在主義

現在主義者にすぐさま突きつけられる問題は、次のようなものである。まず、(1)から(2)を導出する手続きは存在汎化として知られている。

- (1) 小泉純一郎は現在の総理大臣である。
- (2)  $\exists x(x$  は現在の総理大臣である)

(1)から(2)を導出することができ、かつ(2)はある対象の存在についての主張であるため、(1)も何らかの対象の存在を含意するとされる。現在主義者に向けられる問題は、同様のことが次の(3)に対しても言えるように思われることである。

- (3) 伊藤博文は初代総理大臣だった。
- (4)  $\exists x(x$  は初代総理大臣だった)

言うまでもなく、(4)は「初代総理大臣だった何かが存在する」と読むことができる。ここで反対陣営から次のような主張がなされる。(1)と(2)の関係は(3)と(4)の関係に等しいはずである。よって、(3)を真だと認めるのならば、それが含意する(4)が真であることを認めなければならず、したがって過去の対象が存在することも認めなければならない。

この議論に対する現在主義者の対策は三つあり、どれを採用するかに応じて、異なる種類の現在主義を主張することになる。まず、ひとつめの対策は、(3)が(4)を含意することを受け入れた上で、それが現在主義に反しないと論じることである。典型的には、存在量化の対象になるが「存在」しない存在者を認めることである（以下、この立場を「マイニング的現在主義」(Keller (2004), p. 89)と呼ぶ)。この場合、過去や未来の存在者は「存在」しない。ただし、この「存在」は存在量化とは異なる意味で解されねばならない。すなわち、伊藤博文やワールドカップ日韓大会は存在量化の対象である（よって(4)も真)が、どちらも「存在」しない。

しかし、マイニング的現在主義には大きな問題がある。それは、現在主義と永久主義の違いが用語上の問題になることである。マイニング的現在主義における量化の変域は、永久主義の量化の変域とまったく異なる

らない。ただ、マイノグ的現在主義では現在に位置する対象だけが「存在」するが、永久主義では、「存在」が存在量化の対象であることを意味するため、過去や未来に位置する対象も「存在」する。結局のところ両者の違いは、「存在」を存在量化の対象すべてに当てはまるように使うか、現在の対象にしか当てはまらないように使うか、という点に尽きる。つまり、マイノグ的現在主義と永久主義の対立点は存在論上のもではないのである。

「存在」を存在量化とはまったく異なる意味で用いることには独自の眼目があると思われるが、存在論的主張としての現在主義をマイノグ的に解することは、現在主義を永久主義に同化していると言って差し支えないと思われる<sup>2</sup>。

マイノグ的現在主義を採用せずに、(3)が(4)を含意することを認めつつ現在主義を維持することも不可能ではない。そのためには、量化の変域に伊藤博文の代用物を用意すればよい。これがふたつめの対策である。典型的には、個体の代用物として、個別性(thinness, haecceity)が用いられる(以下、この立場を「個別性現在主義」(Keller (2004), p. 96)と呼ぶ)。

この立場によれば、確かに伊藤博文はもはや存在せず、量化の対象にもならない(よってマイノグ的現在主義とは異なる)。にもかかわらず、(4)は真である。なぜなら、「伊藤博文-性」という特別な性質が量化の変域に含まれており、これが(4)を真にするからである。すなわち、個別性現在主義によれば、(4)は、伊藤博文その人が初代総理大臣であるために真なのではなく、伊藤博文と関連するある性質が初代総理大臣だったという、言わば二階の性質を満たすために真なのである。

ただし、個別性現在主義が個別性の実在論ではないことに注意されたい。個別性現在主義では、個別性そのものではなく、個別性を例化する対象だけが存在するとされる。伊藤博文-性を例化している対象は現在存在していないが、小泉純一郎-性を例化している対象は存在する。すなわち、小泉純一郎その人である。個別性は存在するのではなく、存在量化の対象となるに過ぎない。

個別性現在主義が、その目的を果たしていることは疑いないと思われる。だが、このような立場が受け入れられるとは考えにくい。個別性現在主義者からすれ

ば、(3)は伊藤博文が存在していることを含意しない。しかし、同様に(1)も小泉純一郎が存在することを含意しないことになると思われる。というのは、(3)が伊藤博文そのひとについての文ではなく、伊藤博文-性が特定の(二階の)性質を満たすことを意味する文に過ぎないのなら、(1)も同様に、「小泉純一郎-性」が何らかの二階の性質を満たすことを意味することになるとと思われるからである<sup>3</sup>。

次のような文を考えると、個別性現在主義の奇妙さはさらに顕著になる：

(5) 伊藤博文は暗殺されたときハルビンにいた。

個別性現在主義によれば、(5)は、伊藤博文その人ではなく、伊藤博文-性についての文である。よって、文字通り解釈するならば、(5)は偽となる。なぜなら、個別性は空間的位置をもたないので、ハルビンにすることは不可能だからである。よって、個別性現在主義者は(5)を、伊藤博文-性が「暗殺されたときにハルビンにいた」という二階の性質をもつ、と解釈する必要があるだろう。このように、個別性現在主義に基づく文解釈はかなり独特なものとならざるをえない<sup>4</sup>。

現在主義者が行うもう一つの対策は時制論理に基づくものである。この対策によると、過去ないし未来時制の文は見た目通りの論理形式をもつのではない。それを正確に表現するためには時制演算子を用いなければならず、よって存在汎化を単純に適用することはできない、とされる(以下、この立場を「時制現在主義」と呼ぶ<sup>5</sup>)。たとえば(3)は実は(3a)のような論理形式を持つとされる：

(3a) WAS(伊藤博文は初代総理大臣である)

(3a)に含まれる「WAS」は過去時制を意味する演算子であり、WASの作用域内部に現れている存在量化子をWASの作用域の外に出すことを許されない<sup>6</sup>。よって、(3a)が含意するのは、(4)ではなく、次の(4a)

<sup>3</sup> Keller (2004), p. 97 を参照。

<sup>4</sup> 個別性現在主義には別の問題点もある。Keller (2004), pp. 98-99 を参照。

<sup>5</sup> もちろん、この対策はPrior (1970)のものである。

<sup>6</sup> 当然ながら、(3)をde reとして解釈しないことは、この解決策にとって不可欠な要素である。このことは時制現在主義のひとつの問題点だと思われる。この点については、注20も見られたい。

<sup>2</sup> この評価はKeller (2004)に基づく(p. 90)。

ということになる。

(4a) WAS( $\exists x(x$  は初代総理大臣である))

(4a) の存在量化子は WAS の作用域内にある。これは、(4) とは異なり、過去において何かが存在することを意味するに過ぎない。

この立場の要点は、(1) が (2) を含意することは認めつつ、存在汎化の適用範囲に制限を加えることによって、(3) が (4) を含意することを拒否していることである。この結果、存在汎化がそのまま適用できない過去および未来時制の文は、見た目通りの存在論的コミットメントをもたないことになる。このため、先の二つの現在主義とは異なり、量化の変域に現在時制の文が必要とする個体以外の特別な何かを要請する必要はなくなる（したがって永久主義に同化されることはない）。

このタイプの現在主義がもつもうひとつの重要な特徴は、現在と時制の結びつきである。現在、過去、未来の区別は時制を用いずに表現できない。ところが、先の二つの現在主義にとって時制は必ずしも本質的な要素ではない。マイノグ的現在主義の場合、マイノグ的現在主義者が「存在」と言う対象と永久主義者が「現在に位置する」と言う対象は一致する。だが、なぜ一致するのは説明されていない（言わば、一致すれば現在主義が擁護できると主張されているに過ぎない）。個別性現在主義の場合も事情は変わらない。個別性現在主義が「例化されている」とする個別性に対応する単称名辞と、永久主義者が「現在に位置する」と言う対象を指示する単称名辞は一致するが、その理由は明らかではない。それに対し、時制現在主義では時制と存在の関係は明瞭である。時制現在主義では、「存在する」とは、永久主義と同様、「束縛変項の値となること」に他ならない。ただ、現在時制以外の文は見た目通りの論理形式をもたない。パラフレーズによって正しい論理形式を明示すれば、結果として存在論的コミットメントをもつ文は現在時制に限られることになるだけである。つまり、時制現在主義は、先に挙げた二つの現在主義よりも「現在主義」の内実を捉えているように思われる。

### 2.3. 時制現在主義の問題点：関係論法

実際のところ、時制現在主義は標準的な現在主義と考えられており、多くの反論・擁護が時制現在主義を

対象にしている。しかしながら、時制現在主義には独自の深刻な問題が存在する<sup>7</sup>。中でももっとも有名なものは、関係論法 (argument from relations) と呼ばれる次のような議論である<sup>8</sup>。

時制現在主義者は、現在時制以外の文の論理形式を明示的にするためには、時制演算子を使ってパラフレーズしなければならないと主張する。したがって、次のような関係を表す文も時制演算子を使ってパラフレーズされることになると思われる。

(6) 小泉純一郎は伊藤博文を尊敬している。

議論のために (6) は真だとしよう。一見したところ、(6) にも同様のパラフレーズが可能であるように思われるかもしれないが、実際には、求められている結果を得ることはできない。(6) のパラフレーズとして、まず候補に上がるのは、次のような文だろう：

(6a)  $\exists x(x$  は小泉純一郎である  $\wedge$  WAS( $x$  は伊藤博文を尊敬している))

この文は、小泉純一郎（あるいは、いま小泉純一郎である存在者）が、伊藤博文が生きていた頃にも存在し、かつそのときに伊藤博文を尊敬していた場合に真になる。だが、小泉純一郎が生まれたのは伊藤博文の死後なので、(6a) は偽である。

また、次の文も求められている文ではない：

(6b)  $\exists x(\text{小泉純一郎は } x \text{ を尊敬している} \wedge \text{WAS}(x \text{ は伊藤博文である}))$

この文は伊藤博文（あるいは、かつて伊藤博文だった存在者）がいま現在も存在していることを含意する。もし現在主義者が (6b) を認めてよいのであれば、そもそも (3) が (4) を含意することを否定する必要もないだろう。

ここで尊敬関係が時制演算子によるパラフレーズが

<sup>7</sup> 本稿では論じない反論のうち、もっとも深刻なものは、Lewis (2004) が挙げる時制付きの複数形量化子 (tensed plural quantifier) の問題である。これは本質的に時間を幅のあるものとして見ることを必要とするため、時制現在主義にとって、より深刻な問題である。ただし、第三節で提示するタイプの現在主義ではこの問題も生じない。

<sup>8</sup> 以下の議論は Sider (1999) に基づく。

適用できない特殊な関係だとみなしても解決にもならない。明らかに (6) と同種の次の (7) も (6) と同様、パラフレーズできないからである：

(7) 小泉純也は小泉孝太郎の祖父である。

以上の例は時制現在主義の限界を示している。時制演算子を用いたパラフレーズが可能なのは、もとの文に対応する事実が現在時制の文によって表現できる時点がある場合に限られる。もし小泉純一郎と伊藤博文が共に生きていた時点があるならば (6) と (6a) の真理条件は一致するかもしれない。だが、(6) のようにそのような時点がない文はいくらでもありうる。(7) もそのひとつである。

#### 2.4. 疑似真による解決案

関係論法に対する現在主義者からの反論のひとつは、(6) や (7) のような文はすべて偽である、というものである。それによれば、「実際には同じ時点に位置しない対象の間に成り立つ関係はない」(Markosian (2004), p. 58)。ただし、(6) や (7) は真だという直観は、それとは別の真なる文にアピールすることで説明される。たとえば、(7) が真であることは次の文によって説明される：

(7a)  $\exists x(x$  は小泉孝太郎の父である  $\wedge$  WAS(小泉純也は  $x$  の父である))

小泉純也である人物がかつて存在し、その人物の息子だった人物が現在小泉孝太郎の父であれば、(7a) は真になる。ここで注目されることは、(7a) の真理条件は (7) と同じとは限らないが、両者の真理条件は非常に類似していることである。このことから、たとえば次のように主張できるだろう。(7) と (7a) は実際には異なる意味をもつが、その違いが顕著になることはめったにない。だから我々は二つを混同しがちである。実際、Markosian (2004) はこのような主張を行っており、このような混同された文が真であることによって真と思われがちな文は「疑似真 (quasi-true)」だとされる<sup>9</sup>。

しかしながら、どれだけ疑似真の概念が現在主義を擁護するために便利に使えとしても、それが受け入れがたい主張であることは明白だと思われる。その受け入れがたさは、実際に (6) のパラフレーズを考えてみれば明らかとなる。その候補の一つは次のようなものである：

(6a)  $\exists G$ (小泉純一郎は「伊藤博文」の指示対象のみが  $G$  だと信じている  $\wedge$  WAS(伊藤博文は  $G$  である)  $\wedge \forall x$ (もし  $Gx$  ならば、小泉純一郎は  $x$  を尊敬している))<sup>10</sup>

先の説明からすれば、我々が実際は疑似真である (6) を真だとみなしてしまうのは、(6a) と混同してしまうからである。だが、(7) と (7a) の場合は目立たなかったが、(6) と (6a) の見た目は全く異なる。どうして我々はこれほど違う二つの文を混同してしまうのだろうか。これは明らかに説明を要する。

#### 2.5. 時制現在主義の限界

時制現在主義者は、さらなる議論でもって我々が (6) と (6a) を混同することを説明することで、疑似真を使った方法を擁護するかもしれない。しかし、あまり指摘されることはないが、そもそも時制現在主義は根本的な問題を抱えている。

時制現在主義は、問題のある文を問題のない文にパラフレーズするという意味論的戦略によって、現在主義を擁護する立場である。このパラフレーズは時制論理を使って行われる。だが、時制論理の意味論は可能世界意味論の一種（個々の世界を時点と解釈する）によって与えられるのが通常である。このことからすれば、時制論理を使ったパラフレーズが正当なのであれば、それはすべての時点が実在とする存在論一すなわち永久主義一によって説明されると考える方が自然ではないだろうか。

可能世界意味論が可能世界の存在にコミットしているかどうかは、様相の形而上学においてよく知られた問題である。そして、もっともスムーズな取り扱いを与えることができるのは、Lewis (1986) の様相実在論であることも有名であろう。もちろん、様相実在論の評判はよくない。それは、可能世界が実在するという

<sup>9</sup> 厳密には、ある文が疑似真であるとは、その文が「非経験的ないし哲学的な事実だけによって真ではない」(Markosian (2004), p. 69) 場合とされている。

<sup>10</sup> これは Sider (1999) に基づいているが、本稿に合わせてかなり簡略化してある。

主張が明らかに過剰な存在論を引き受けることになるからである。現在主義者のなかには (Markosian のように)、このことに注目し、時制論理は様相論理の一種なので、様相実在論を拒否するのと同じ理由で永久主義を拒否すべきだと主張するものもいる。しかし、様相の形而上学と時間の形而上学にどこまで同じことが成り立つのかは決して自明ではない。むしろ、両者の間には大きな違いがある。いくつか提示しよう。ひとつは線形性である。時間は (少なくとも個々の基準系から見れば) 線形に並ぶ。しかし、可能世界が線形に並ぶとは思われない。もうひとつは、時間の流れである。どの未来もやがては現在になり、そして過去になる。一方、ある可能性が現実になることがあるとしても、それからまた可能性に戻ることはなく、また、決して現実にならない可能性があることは明らかである。最後に、様相実在論は考えられるすべての可能性について、それがどれだけ途方もないもの (たとえば加算無限個の椅子が存在する可能性や時間が存在しない可能性) であっても、対応する世界が実在することを求める。一方、永久主義も考えられるすべての時点について、その時点が実在することを認める。しかし、どれだけ過去の時点でも、また、どれだけ未来の時点であっても、それに対応する世界は、加算無限個の椅子を含む世界や時間が存在しない世界に比べれば、「途方もないこと」とは思われない。

また、仮に様相実在論と同様の理由でもって永久主義を拒否するのなら、現在主義者は、様相現実主義者が現実世界に存在する材料から可能世界の代替物をつくりあげる必要があるのと同じように、現在存在する材料から各時点の代替物をつくりあげることになるだろう。しかし、少なくとも様相現実主義者にとって、この課題は極めて困難である<sup>11</sup>。

このように、仮に関係論法が解決可能だとしても、時制現在主義には解決しなければならない独自の問題が残されていると思われる。そして、その困難さは、他の現在主義に比べて軽度だとは思われない。

### 3. Truthmaker 原理と新しい現在主義

前節では、様々な種類の現在主義を整理して検討してきたが、結論としては、そのどれもが困難を抱えているというものだった。しかしながら、このことは、い

かなる現在主義も維持困難だということを意味するのではなく、単にこれまで提案されてきた現在主義が維持困難であるということの意味するに過ぎない。本節では、Truthmaker の概念を用いた新たな種類の現在主義を提示し、それがここまでに登場した困難とは無縁であることを示したいと思う。

#### 3.1. Truthmaker 原理とは何か

「Truthmaker」<sup>12</sup> という概念は、現代形而上学の文脈では Armstrong の名前と切り離して考えることはできない。Armstrong が主張する Truthmaker 原理とは、簡単に述べるなら、「真である命題は世界の中に存在する何かによって真であるのでなければならない」(David (2005), p. 141) というものである。すなわち、「真理の担い手」たる命題は何らかの存在者によって真になるのであり、そのような存在者が「Truthmaker」と呼ばれるのである。

本稿では「Truthmaker 原理」を次のように規定することにする。ただし、Truthmaker 原理の正確な定式化については多くの議論があるため、これはあくまでポイントを理解するためのものに過ぎないということに注意されたい。

(TP) 文 P が真である iff P の Truthmaker が存在する<sup>13</sup>。

(TP) の誤解されやすい点について多少触れておこう。まず、真であるすべての文について (TP) が当てはまるのかどうかについては Truthmaker 原理の支持者の間でも意見が分かれる。たとえば、否定的真理や必然的真理にも Truthmaker が必要だと考えるものもいれば、(TP) が当てはまるのは肯定的な偶然的真理に限られると考えるものもいる。しかし、この違いは本稿で提示される現在主義に影響を与えることは(おそらく)ない。

次に、(TP) が成り立つ理由である。Armstrong によれば、(TP) の右辺で登場する Truthmaker と左辺で登場する文 P の間の関係 (truthmaking 関係と呼ばれる) は (反対称的な) 必然化関係である<sup>14</sup>。別の言い

<sup>12</sup> 本稿では、題目から一貫して「Truthmaker」を訳さず使用しているが、これは単に適切な訳語が見つからないためである。

<sup>13</sup> これは Armstrong (2004), p. 17 の定式化を簡略化したものである。

<sup>14</sup> Armstrong (2004) の第 2.3 節を参照。

<sup>11</sup> この点については、Sider (2003) が詳しい。

方をすれば、Truthmaker が存在するときに P が真であることは、必然的でなければならない。このことは「真理は存在にスーパーヴィーンしている」(Bigelow (1996), p. 38) とも表現される。a が b にスーパーヴィーンするとは、a に違いがある可能世界では必ず b にも違いがある (b に何の違いもない可能世界では a の違いもない) ということだが、これは P の Truthmaker が存在するにも関わらず、P が偽であるような可能世界は存在しないと考えられている (たとえば Armstrong (1997), p. 115) ことと符合する。ただし、これは truthmaking 関係が可能世界などの様相的概念を使って還元できるということを意味するのではなく、truthmaking 関係の内実は、ある種の必然化を伴う反対称的依存関係と考えられるべきだということを表しているに過ぎない。

### 3.2. 存在論的コミットメントの基準

さて、本稿における (TP) の役割は、存在論的コミットメントと関連している。前節までは、Quine 流の存在論的コミットメントの基準 (量化の変域に含まれることを存在することと同一視する) が前提されてきた。別の言い方をすれば、(P) は次の (Pa) として解釈されてきたのである。

(Pa)  $\neg \exists x(x$  は現在の対象である)

これは 2.2 節の存在汎化を用いた議論からしてそうだった。そこで問題となっていたのは、次の (4) である。

(4)  $\exists x(x$  は初代総理大臣だった)

この文が現在主義に反するのは、この文が意味するのが「初代総理大臣であった何かが存在する」であり、その「何か」とは、現在の対象ではない伊藤博文に他ならないからである。だが、この議論は、(P) を (Pa) と解しない限り成り立たない。しかし、Truthmaker の概念を用いれば、(P) を次のように解することも可能である。

(Pb) すべての Truthmaker は現在に位置する。

言うまでもなく、これにより (4) と (P) が直接的に矛盾することは回避される<sup>15</sup>。

このような理解が可能なのは、Armstrong (2004) が論じるように、(TP) は、Quine 流のものとは異なる存在論的コミットメントの基準になり得るからである。すべての真理が Truthmaker を必要とするならば、すべての Truthmaker を網羅したリストが得られれば、それが必要な存在者のリストとなる。なぜなら、リストから漏れた存在者がいるとしても、それはいかなる命題の真偽にも影響しない。そのような存在者を存在者と認めることに何の意義があるだろうか (p. 23)<sup>16</sup>。

また、(TP) を存在論的コミットメントの基準とすることは、次のようにも正当化できる。そもそも、どうして量化の変域に含まれることが存在することと同一視されねばならなかったのだろうか。多少乱暴に言ってしまうと、その理由は次のようなものだと思う。 (1) が真であるためには、小泉純一郎であるような対象が存在している必要があるだろう。さらに、(1) は (2) を含意するので、(1) が真であるために必要とされる対象が存在すれば、(1) だけでなく (2) も真になるはずである。このことを説明するためには、「小泉純一郎」の指示対象が量化の変域に含まれており、それが「現在の総理大臣である」という述語を満たせばよい。そして、これと同様のことが多くの文について言えるだろう。よって、多くの文について次のように言えると思われる。我々がその文を真だと信じるためには、それが真であるために必要な何かが存在することだけでなく、その何かは量化の変域に含まれているということにもコミットしなければならない。

もし Quine 流の基準の背後にあるのがこのような考察であるならば、(TP) は Quine 流の基準とはまったく異なると基準だとは言えない。むしろ、量化の変域に含まれる対象とは Truthmaker に他ならないと考えることもできるだろう。つまり、(TP) は従来の Quine 流の存在論的コミットメントの基準を裏付ける

<sup>15</sup> 当然ながら、ここで次のような反論があるだろう。すなわち、(3) と (4) の Truthmaker は伊藤博文なのだから、結局 (3) と (4) は (Pb) の反例ではないだろうか。この反論については次の 3.3 節で論じるが、この反論にとって (3) から (4) が帰結することは無関係であり、したがって、これは存在汎化を用いた議論とは別の反論であることに注意されたい。

<sup>16</sup> (TP) を採用することは、事態や普遍者の存在を認める Armstrong の存在論を受け入れることを意味しない。この点については、Melia (2005) を参照。

という意味で、より基礎的な原理だと考えることもできるのである。

### 3.3. 時制付き性質と証拠現在主義

ところが、現在主義者には都合が悪いことに、以上の議論が正しいとしても、単に (P) を (Pb) と解釈するだけでは現在主義を救うことはできない。このことは (3) と (4) を例に取れば一目瞭然である。(3) と (4) の Truthmaker は伊藤博文以外にあり得ないように思われるが、それは (Pb) が偽であることを認めることに他ならない。よって、現在主義を擁護するためには、存在論的コミットメントの基準として (TP) を採用し、(P) を (Pb) と解することに加えて、もうひとつ何か別の主張を行う必要がある。

Bigelow (1996) の主張はまさにこのような主張の一例である。Bigelow は、過去時制や未来時制の文の Truthmaker は個々の対象ではなく、存在者の総体である世界そのものだと主張する (p. 46)。彼によれば、現在の世界は、たとえば「伊藤博文が初代内閣総理大臣だった世界であること」という時制を含んだ性質をもつ。この「時制付きの性質を例化している世界そのもの」が (3) や (4) の Truthmaker の役割を果たすと Bigelow は主張する。この結果、これまでに検討してきた現在主義者の問題点は解消されることになる。というのも、(4) や (6) のように一見したところ過去や未来の対象にコミットしているように見える文であっても、結局のところそれらの文の Truthmaker は現在の世界そのものにすぎないからである。

意外かもしれないが、世界そのものを Truthmaker とみなすことは、かなり筋の通った主張である。まず、ある対象がある性質をもつことは、その対象が当の性質をもつ対象すべてから成る集合に属することだと考えられる。よって、「伊藤博文が初代内閣総理大臣だったこと」という性質を例にすると、現在の世界がその性質をもつことは、現在の世界が、この性質と対応する文 (すなわち (3)) が真であるような様々な時点 (すなわち、伊藤博文が総理大臣でなくなって以降に位置するすべての時点) における世界から成る集合に属していることとみなすことができる。ところで、命題はそれが真であるような可能世界の集合と同一視することができる。よって、(3) によって表される命題は、それが真である可能世界の集合、すなわち、伊藤博文が総理大臣でなくなって以降に位置する時点すべてにおける世界から成る集合と同一視することができる。し

たがって、世界が問題の性質をもっている限り、(3) は偽にならない。つまり、(3) が真であることは、現在の世界が問題の性質をもっていることにスーパーヴィーンしているのである。

だが、Bigelow の立場は、そのままではそれほど魅力的ではない。まず、彼が言う「世界の性質」とはどのようなものを意味するのだろうか。上述した「ある対象がある性質をもつことは、その対象が当の性質をもつ対象すべてから成る集合に属することだ」を文字通りに受け止めるなら、世界がもつ性質は世界の集合に還元できる。だがこれは、様々な時点に位置する様々な世界がどれも存在することを認めることである。これはある種の永久主義 (あるいは様相实在論) を認めることと変わらない。もし性質を還元しないならば、過去や未来の様々な事実に対応する性質が、抽象的对象として文字通り存在することになるだろう。確かに、これは現在主義に反するとは言えない。だが、これは単に、大量の抽象的对象を認めることによって具体的対象の数を減らしただけではないだろうか。特段の理由がない限り、これは現在主義を正当化するためのアドホックな措置であるように思われる<sup>17</sup>。さらに、仮にこのことが正当化できるとしても、「伊藤博文が初代内閣総理大臣だったこと」という性質と伊藤博文その人との関係を説明することが次の課題となる。これは、世界が抽象的对象としての性質をもつことがどういうことなのかを説明した上で、それが個体には依存しないことを示さねばならない。これが困難な課題であることは明らかだと思われる。

だが、これらの困難は、「世界が性質をもつこと」が現在に位置する存在者に依存しているならば解決できる。これがアドホックな主張でないことは次のようにして示すことができる。まず、過去についての真理でよく例に出されるのが次のような恐竜の例である。

(8) かつて恐竜が存在した。

ふつう (8) が真であることは、ジュラ紀や白亜紀の地球には恐竜が存在していたという過去の事実によって説明される。しかし、現在主義からすれば、そのような事実が端的に存在するのではない。むしろ、我々はかつてそのような事実があったことを間接的な手段で

<sup>17</sup> Sider (2001) は、Bigelow の主張は現在主義を救うためのズル (cheat) に過ぎないと言っている (p. 37)。



もって知ることができるだけである。実際、(8) が真であることは、恐竜の化石が存在することによって知られているに過ぎない。すなわち、現在において恐竜の化石が存在するがゆえに、我々は(8)を真とみなしているのである。

つまり、本稿の現在主義とは、過去や未来についての言明の Truthmaker がすべて現在に位置するという点で Bigelow の立場を引き継ぎつつ、世界そのものではなく、化石のように問題の言明が真であることの「証拠」とされるものを Truthmaker に含めることによって Bigelow の問題点を解消するものである(したがって、(8) の真偽も化石(ないしそれに代わる「証拠」)の有無によって決定されることになる)。Bigelow が指摘するように、(3) が真であることは現在の世界が対応する時制付き性質をもっていることにスーパーヴィーンすると考えることができる。この新しい現在主義では、これに加えて、現在の世界が時制付き性質をもっていることは、それに必要な何らかの「証拠」が現時点において存在することにスーパーヴィーンすると主張する。そして、3.1 節で述べたように truthmaking 関係が反対称的依存関係であることからすれば、これはその「証拠」こそが(3)の Truthmaker だという主張に他ならない。これは以下のように定式化できるだろう。

- (E) 過去時制や未来時制の文の Truthmaker は、過去や未来ではなく現在に位置し、典型的には当の文の「証拠」<sup>18</sup>となる存在者である。

以下では、この立場を「証拠現在主義」と呼ぶことにする<sup>19</sup>。

証拠現在主義の特徴は、Bigelow の立場のメリットをそのまま引き継いでいることである。証拠現在主義者と Bigelow の両方にとって、過去時制や未来時制の文の Truthmaker は現在の存在者である。そして、どんな対象を量化しているように見える文であっても、それがコミットしているのは量化されている対象では

なく、その文の Truthmaker である。両者の違いは、Bigelow にとって Truthmaker は時制付き性質を備えた現在の世界そのものであり、これが新たな問題を生み出していたのに対し、証拠現在主義の Truthmaker は化石などであり、これによって新たな問題が生じるとは考えにくい点である。

### 3.4. 時制付き性質と傾向性の類似性

残念ながら、残された紙幅の関係上、本稿で証拠現在主義を擁護するために十分な議論を行うことはできない。しかし、その正当性を多少なりとも示すため、一点だけ述べておきたいと思う。それは、時制付き性質と傾向性が酷似していることである。

既に述べたように、Bigelow の主張の問題は、時制付き性質という概念がまともなものとは思われないことだった。しかし、時制論理が様相論理の一種であることを考えれば、時制付き性質を時間版の傾向性、特に現実には顕在化しない傾向性として理解することができる。

傾向性と時制付き性質の類似点は次のように示すことができる。まず、ある対象が傾向性をもつことも世界が時制付き性質をもつことも、様相(時制)論理を使って形式化できる。さらに、どちらも話者の世界とは別の世界において、ある事柄が成立しているがゆえに、問題の対象ないし世界がその性質をもつとされる。そして、重要なことに、実際には別の世界について直接知ることはできないため、話者の世界で特定の条件が成り立っているかどうかを調べる(検証する)ことによって、問題の対象ないし世界がその性質をもつことが決定される。すなわち、ある物体がある傾向性をもっているかどうかは、その傾向性をもっているかどうかで判断される(たとえば、もし目の前の物体がショ糖と同じ化学組成をしていれば、そのことによって、その物体は水溶性だと判断される)。一方、過去時制の文が真であるかどうかは、それを裏付ける証拠が発見されるかどうかによって決まる(たとえば(8)は、目の前に化石があることによって真だとみなさる)。これらの類似点を図にするとこのようになる<sup>20</sup>。

これらの類似点に基づき、次のように論じることが

<sup>18</sup> 未来時制の文を考慮すれば「証拠」という表現は適切ではないが、他に適切な言葉が見当たらないので、本稿では「証拠」を用いることにする。

<sup>19</sup> Parsons (2005)で論じられて(そして否定されている)痕跡説(trace answer)は証拠現在主義の一種だと思われる(p. 172)。ただし、Parsons の Truthmaker の規定は(TP)とは異なる(p. 169)。

<sup>20</sup> ここでは de dicto の時制付き性質を例にするが、証拠現在主義は時制現在主義と異なり、de re の時制付き性質を認めることができる。むしろ、こちらの方が傾向性と類似性は高いと思われる。

表1 傾向性と時制付き性質の類似点

	傾向性	時制付き性質
命題	水砂糖は水溶性である	かつて恐竜が存在した
形式化	◇(水砂糖が水に融解している)	WAS (恐竜が存在している)
検証条件	水砂糖の化学組成は $C_{12}H_{22}O_{11}$ である	現時点において恐竜の化石が存在している

できるだろう。一般に、ある物体が顕在化されない傾向性をもっているとき、その理由として、別の可能世界が実在し、その世界では問題の傾向性が顕在化しているからだと主張されることはほとんどない。実際、現実世界で成り立っている事柄だけに基づいて、そのような可能世界の問題の概念を用いた語法が根拠付けられ、また、その物体が問題の傾向性をもつかどうかが決まると考える方が健全であろう。証拠現在主義は、これと同じことを時制に関して主張しているのである。すなわち、証拠現在主義者は、ある過去時制の文が真であるのは、その文に対応する過去の事実が文字通り実在するからではなく、そのような事実が成立しているかどうかは、現時点において成り立っている事柄だけに基づいて決定されるべきだと主張しているに過ぎない。

誤解を招きやすいようだが、これは、過去の事実が成立しているかどうかは何らかの検証プロセスによって決定される、という主張ではない。水溶性の場合、水砂糖が上記の構造式をもつことはその必要条件とは限らない。というのは、もし構造式が微妙に異なるにも関わらず水に溶ける水砂糖が開発された場合、問題の検証条件は修正されると予想されるからである。つまり、我々はある仮説に従って水溶性であるかどうかを判定しているだけであり、それが将来修正される可能性は否定できない。同様に、時制付き性質にとっても、証拠によって検証されることが必要条件とは限らない。我々は化石の発見によって恐竜が存在したと判定しているだけであり、それが捏造だった可能性は否定

できない。つまり、証拠現在主義者は、過去時制の文の真偽が我々の検証するプロセスとは独立に定まっている可能性を否定しない。証拠現在主義者が主張するのは、そのような文の場合でさえも、その Truthmaker は現在に位置しているということである\*。

### 参考文献

- Armstrong, D.M., (1997), *A World of States of Affairs*, Cambridge University Press.
- Armstrong, D.M., (2004), *Truth and Truthmakers*, Cambridge University Press.
- Bigelow, J., (1996), "Presentism and Properties," *Philosophical Perspectives*, 10, 35-52.
- David, M., (2005), "Armstrong on Truthmaking," in Beebe, H., and J. Dodd (eds.), *Truthmakers*, Oxford University Press, 141-159.
- Keller, S., (2004), "Presentism and Truthmaking," *Oxford Studies in Metaphysics*, 1, 83-104.
- Lewis, D., (1986), *On the Plurality of Worlds*, Blackwell.
- Lewis, D., (2004), "Tensed Quantifiers," *Oxford Studies in Metaphysics*, 1, 3-14.
- Markosian, N., (2004), "A Defense of Presentism," *Oxford Studies in Metaphysics*, 1, 47-82.
- Melia, J., (2005), "Truthmaking Without Truthmakers," in Beebe, H., and J. Dodd (eds.), *Truthmakers*, Oxford University Press, 67-84.
- Parsons, J., (2005), "Truthmakers, the Past, and the Future," in Beebe, H., and J. Dodd (eds.), *Truthmakers*, Oxford University Press, 161-174.
- Prior, A.N., (1970), "The Notion of Present," *Studium Generale*, 23, 245-248.
- Sider, T., (1999), "Presentism and Ontological Commitment," *Journal of Philosophy*, 96, 325-347.
- Sider, T., (2001), *Four-dimensionalism*, Clarendon.
- Sider, T., (2003), "Reductive Theories of Modality," in Loux, M.J., and D.W. Zimmerman (eds.), *The Oxford Handbook of Metaphysics*, Oxford University Press, 180-208.

\* 本稿の内容は、2005年度科学基礎論学会総会と講演会における著者の講演の内容に基づいている。コメントを下された方々、および査読者の方々にここで感謝の意を表す。また、本稿は文部科学省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)から支援を受けた研究成果の一部である。

---

## *Presentism, Tense, and Truthmaker*

Tora KOYAMA\*

### **Abstract**

In this paper, I try to defend Presentism. First of all, I explore how Presentism diverges to its versions and show that none of them, which include the currently standard Presentism that invokes tense logic, are tenable. Next, I point out that some philosophers argue that by replacing the Quinean criterion of existence with the Truthmaker Principle, another version of Presentism, which invokes tensed properties, can emerge. However, this version has a highly implausible conclusion. Finally, I argue that it can be avoided by taking the evidences of the past or future truths to be typical truthmakers of them.

---

\*JSPS Research Fellowship for Young Scientists PD (Keio University)